
走りたがりの暗殺者（仮）

玄野 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

走りたがりの暗殺者（仮）

【Nコード】

N6009X

【作者名】

玄野 光

【あらすじ】

『――このゲームがクリアされるまでログアウトすることはできません』この言葉を聞き、俺は思う。「一旦スルー。面倒くさいから別のことを考えるか」と。そしてその“別のこと”とは何なのか？と聞かれればこうだ「――よし、これが終わったらとりあえずあてもなく走ろう」

これはそんな考え持つ、一人の少年の話。

001..止まるリアルと始まるセカイ【1】（前書き）

こんにちは、玄野洸です。

酷い文ですが、もし良かったら暇つぶしにでも読んでやってください。

それでは、どうぞ。

001..止まるリアルと始まるセカイ【1】

『——このゲームがクリアされるまで、ログアウトをすることは出来ません』

ほんの少しでも動こうものならば、他の人とぶつかってしまうであろう距離。

始まりの町〈ユーレシア〉の一番大きな広場に集められた一万人のプレイヤーがかたずをのんで聞き耳を立てる中で、システムによる合成音声が辺りを震わせる。

この世界を創造したであろう人間は、一体何を考えているんだろうか？ しかし、その創造主が「出来ない」と言うのなれば出来ないのかもしれない。

全く、どうしてこんな事になってしまったのだろうか。

本来なら俺は今まで慣れ親しんだ町内を思い切り走りまわっていたはずなのだが……。

兎にも角にも、俺は厄介事に巻き込まれたらしい。

俺は長年培った来たスルースキルを駆使してその事をいったんそこら辺に放っておく事にしてみた。周りの連中は叫んだり怒ったり泣き喚いたり忙しそうだ。全く、少しは落ち着けって言うんだ。ここは俺みたいに「一旦スルー。面倒くさいから違うことでも考えるか」だろうが。

それでもって俺が考える『違うこと』ってうのはこれだ。

——よし、とりあえずこれ終わったら宛てもなく走ろう。



「は？」「World Diver」が当たった？」

「そうそう！ 凄くない！？」

「そりゃ凄いけどよ……」

ワールド「World ダイバーDiver」。通称はWD。それはこの世に初めてVRをもたらしした新時代の電子機器。
ヴァーチャルリアリティ

頭の全体を全て覆うフルフェイスのヘルメットのような形状のそれは本来頭がやり取りするはずの脳波——つまり電気信号に、偽物の電気信号を意図的に割り込ませることで本来知覚している世界とはまた違う世界を知覚することができるというものだ。

この技術は軍事や医療などに使われていて、最近発展を見せ始めているものだ。

そして出てきたのが、『ゲームの中に入って遊ぶ』と言うもの。

それまでは一般人に手の出す事の出来ない相当に高価なものだったのだが、近年は比較的安価な物になっていて、普通の家庭であれば一台は普通に変えるだけの値段になっている。

それでもってこの世界に瞬く間に普及したのがVRMMORPGと言うジャンル。元からMMORPGと言うジャンルは流行ってい

たのだが、それにVR技術が加わることで爆発的な広がりを見せたものだった。

兎に角は『ゲームの中に入って他人と遊ぶ』——って言う事がただの一般人でも可能になったということだった。

まあ、それは”ただの”一般人の話。

俺の場合は”貧乏な”一般人だ。何が言いたいかと言うと、俺の家にはWDが無いってことだ。……今の今までは。

「だよね？ やっぱ兄さんも驚くよね」

「しかも三台！ これで三人全員一緒に出来るでしょ！」

「さんっ、三台！？」

驚いた……。まさか三台も当たってたなんて。一台当たればいい方なんじゃないのか？ いや、俺は何の応募でそれが当たったのか知らないから何とも言えないが。

俺の目の前にはついさっき俺の部屋に興奮した様子で突撃してきた夏姉と、少し遅れて部屋に入ってきた秋穂がいた。

夏姉こと、キクジマ季久島夏乃はなんつか……、美人だ。うん。弟の俺から言えるくらいの美人。

艶のある黒髪は腰まである長いポニーテールにして結い上げている。髪と同じキリリとした黒い瞳やスツと通った鼻筋などのおかげで何処か大人っぽい……、凛とした印象を与える美人だ。身体にしても、本当に高校三年生か？ と疑いたくなるほどの背の高さとグラマーさでナイスボディだ。半端ねえ。

しかも凄いのは外見だけじゃないと来た。高校二年から連続して生徒会長を務め、人望も厚い。更にはテストをすれば学年の十位以内には必ず名前が挙がるといった頭も持ってる。少し分けてほしい。

クラスの奴からも、『夏乃先輩ってお前のお姉さんなんだよな？
こ、今度さ、俺に紹介してくれよ。な？ な？ 俺達……友達だ
ろ？』とか言われるほどだ。もう一つ言うならば、俺のそう言っ
てきた奴は友達でも何でも無い。入学してから二、三回しか話した事
(しかも事務的報告)が無い奴が友達とか言えるか。阿呆め。

そんでもって秋穂こと、季久島秋穂^{キクジマ アキホ}は、これも例に漏れず可愛い。
兄の俺でも肯定するほどだ。間違いない。

少し色素の薄いライトブラウンの髪を肩甲骨のあたりまで真っ直
ぐ伸ばしていて、おっとりとした感じの垂れた瞳とぷくらと膨ら
んだ桃色の口元が柔らかな雰囲気をかもし出している。可愛い娘っ
て感じた。身長に関しては俺より頭一つ小さくて、それで……うん、
夏姉の身体を少しでも分けてやれば良かったのにと本当に思っ
ているよ、俺は。——…まあ、端的に言えばペタンコだ。

そしてもう一つ、こいつも夏姉同様に頭がいい。むしろ夏姉より
も頭がよく、高校入って初めてのテストでは三位の中に君臨する——
と、言うか一位だったらしい。少しどころか半分くらい分けて
ほしい。

クラスの奴からは、『秋穂ちゃんって可愛いよなあ。……そうい
えば君の妹なんだろ？ ——なあ、僕と秋穂ちゃんの仲を認めて
くれよ』とか言われるほどだ。バカ野郎。お前秋穂と面識無いだろ
うが。そんでもってお前は誰だ、見たことねえぞ。……って教師じ
ゃねーかつ！ 急に話しかけて来てそれは無いだろうがこのロリコ
ン野郎がっ。妹は大学卒業するまでは誰にもやらん。

そして俺こと季久島冬紀^{キクジマ フユキ}はそんな姉妹の間で育ってきた極々普通
の男だ。分かってほしい、俺は男なんだ、男なんだぞ？ 周りの奴
みたいに『女の子みたい』とか言うんじゃないっ！

……ああ、ごめん。取り乱した。ともかくは俺は黒い髪が長めに
垂れていて、瞳もまた黒い。しかし夏姉のような凛々しさは無く、

何処か暗い色だ。身体の線も細いから『女の子みたい』とか言われるのかもしれない。身長に至っては夏姉に届いてないなんていう情けない事態だ。夏姉は元々女子の中では突出して身長が高いから、追いつけない俺でもそれなりの高さがある。でも、でもっ、あと二センチなのに……っ！

……っと、すまん、取り乱した。そんでもって俺は上と下の姉妹に比べて学が足りない。テストでは毎回平均を少し上回るくらいだ。本当、何で俺だけこうなんだろうかな？

俺が二人に勝てていることを唯一上げるとするならば……、足の速さくらいか？ あと運動神経かな。でも、運動については夏姉にだけ負けそうで怖い。

うーん……本当に何で俺だけこうなんだろうかなあ？

考えれば考えるほどに疑問である。

「でも三台ってどうやったらそんなに当たるんだ？」

「たまたまよ、たまたま。全くの偶然」

「そうなんだよ。わたしたちが応募した分と兄さんの分が全部当選したの」

「——ちょっと待て、何時の間に俺の分なんか出したんだ？」

「私が勝手に出したわ」

「何やってんだよ！ ……っと言いたいところだが当たってるし何も言え無いよなあ……」

「そうそう。当たったんだから結果オーライでしょ？ それに私が出してなかったらゆきだけ一人ぼっちでPCのMMOやる羽目になるじゃない？」

ちなみに俺たち全員PCのMMORPGプレイヤーである。

俺たちがプレイしているのは、〈クロニクルオンライン〉と言うゲームだ。

国内で最大級と言われるそのゲームを始めたのは夏姉が最初であった。そして次にプレイし始めたのは俺、秋穂の順だった。〈クロニクルオンライン〉よくある中世ヨーロッパを舞台にしたゲームで、数年前までは国内最大のシェアを誇っていたが、最近はVRMMOにユーザーを取られていて過疎化してきたタイトルでもある。それでもここまで生き残ったのはもうほとんど無い。

もう一つ加えるのであれば〈クロニクルオンライン〉での強さ・廃人度は夏姉、秋穂、俺、の順番である。——と、言うか何故そんなにゲームに時間を割いているのに頭がいいんだ……？ 永遠の疑問である。

あ、あと”ゆき”は俺の愛称だったりする。

「……そう言えばなにに応募してWDが当たったんだ？」

「オープンβテストよ。Laplace社が初めて出すVRMMOのオープンβテスト」

『Laplace社』^{ラプラス}と言うのは俺たちがプレイする〈クロニクルオンライン〉を製作、運営している会社である。

〈クロニクルオンライン〉の過疎化にあたってそれを停止し、新たにVRMMOの開発を始めているという話は聞いていたが、まさかこんな形で関わることになるうとは思わなかった。

「それで、そのゲームのタイトルは？」

「〈エターナルオンライン〉って言うらしいよ」

「へー……で、肝心のWDはいつ届くんだ？」

「連絡では一週間後らしいわ」

「……ってことは夏休みの初日と重なる訳か」

「そうね、この分だと夏休みはゲーム三昧よ！」

「お姉ちゃん、やり過ぎないでね」

「わ、わかってる、わかってるわよ」

行き過ぎそうになる夏姉と、それを早々たしなめる秋穂という何時もの光景を見ながら、ポケッとしていると、不意に俺の部屋に置いてあるアラームがピピピッと甲高い音を立てた。

「お、もうこんな時間か」

「今日も行くの？」

「もちろん」

「……兄さん、最近噂になってるよ？」

「……ど、どんなだ？」

「『夜の八時半くらいになると奇声を上げながら走り回ってる変質者がいる』って……」

「ま、マジかよ……」

「ぷっ、あっははは。なに、ゆきって変態なの？」

「違うっ！」

「いや、でも実際言われてるんでしょ？」

「そうかも知れないけど……。ああっ、もうどうでもいいや！ 走ってくる！」

笑う夏姉と苦笑する秋穂の居る俺の部屋を飛び出し、俺は玄関へと向かっていくのだった。



黒の簡素なジャージとランニングシューズに身を包んだ俺は、淡い暗闇の広がる遊歩道へと歩み出た。

何時もの様にトントン、と靴の先を地面で叩き、馴らす。

「つたく、誰が奇声を上げる変質者だよ」

先ほど聞いた秋穂の言葉とけらけら笑う夏姉が脳裏を通り過ぎ、ちよつとムツとした表情を作る。まさかそんな風に噂されていたなんて全く知らなかった俺は少し憤慨するのだが、数分もすればそれも収まった。

「――ま、それなら噂されないようにすれば良いだけか」

そう、俺は呟く。

なーに、噂されないようにするのは簡単だ。俺が奇声を上げながら走ってるのが問題なのだから、無言でランニングをしてればいいんだ。夜にランニングなんて誰でもやってるだろうしな。

「うしっ、出発っ」

数回の屈伸運動をした俺は、そう小さく息を吐きながら足を動かす始める。

タッタッタッタと、リズム良く音を奏でる足音を聞いていると、自然と気分が向上してくる。それと比例して奏でる足音のリズムがスピードを増す。そしてそれを受けてまた俺のテンションが上がる。なんと言うか、いつも思うがウナギ登りだ。

ものの数十秒で最高に高揚した俺のテンションは、もはや俺の言う事を聞かなくなる。

俺はそのテンションに身を任せて、青白い街灯に照らされた遊歩

道を風の如く駆け抜ける。

（あ、ああ、駄目だ。これは出る。絶対に出る。確実に出る）

大部分を最大のテンションに占領された俺の中でわずかに残っていた理性がそう言う。しかし、それももう遅い。

「いやっつほおお——————つうっつ！！！」

わずかに残っていた俺の理性が、その声で早々と折れた。

「いっつえええ————————っいっつ！！！」

そのあとに俺のテンションが元に戻ったのは過度の疲労で立ち止まった約三十分後だった。

001..止まるリアルと始まるセカイ【1】（後書き）

暇つぶしくらいにはなっただでしょうか？

002..止まるリアルと始まるセカイ【2】

「えっ、お前もへエターナルオンラインのオープンβに当選したのか!？」

「ああ、何か知らない内に当選してた」

昼休みになった教室は、ガヤガヤと騒がしいものになっている。

俺は何でもないように返事を返しながら弁当——俺の家は父子家庭かつ、上と下の姉妹は料理だけはからっきし駄目なので俺が毎朝作っている。当然、夕食も俺だ——を広げた。今日のおかずは卵焼き常備に、ベーコンとほうれん草の炒め物と鶏の唐揚げにレタスとトマトの簡単なサラダ。今日の唐揚げは我ながら出来が良い。

「でも、お前んちってWD無かったんじゃないかったのか？」

「それならなんか三台当たった」

「はあ!？」

それで俺の机に自分の机をくっつけて購買で買ってきた焼きそばパンとカレーパン、それにクロツケパンを頬張りながら驚きを表しているのは友人の神田誠二^{カンダセイジ}。短い茶髪をツンツンと立たせたそれなりのイケメンである。一年の最初の席が前と後ろだったとこれから始まった仲だ。何の因果かこいつもヘクロニクルオンラインをやっている、それで話が弾み今ではすっかり仲のいい友人になっている。

「そう言えば”お前も”って言ってたが誠二も当選したのか？」

「あ、ああ。俺の方はWDを元々持ってたから確率の高いほうに応募して当選したんだが……」

そこで一度言葉を切り、誠二は信じられないような目つきでこちらを見ながら、言う。

「確率の低いWDセットの方で三台も当たるなんてなあ……」

「うん、俺もびっくりだ」

「……ん？ 三台ってことは夏乃先輩と秋穂ちゃんも来るのか？」

「おう。誰一人としてぼっちになる事無くこの夏を切り抜けられそうだ」

「そ、そうかあ……。夏乃先輩もくるのかあ……」

急にトリップし出した誠二。理由は至極単純である。こいつは夏姉に惚れてるのだ。結構俺の家に遊びに来たりするのだが、初めて来たときに一目惚れだそうだ。いやー、青春だねえ……

そしてこうやってトリップした誠二を現実に取り戻すのにも、もう慣れたものだ。俺は弁当をついばんでいた箸を置き、きゅつと指を引き絞る。そのまま誠二の額あたりまで持っていき思い切り離すと、パチンツと小気味いい音と共に指の先で誠二のでこを叩く。所謂デコピンだ。

「あだっ」

「戻ったか？」

「お、おう。すまん」

「なーに、気に済んな」

最初の方は文句言ってた誠二も、最近はこんな感じである。慣れつつ恐ろしいもんだ。

「しかし、遂に冬紀もVRデビューか」

「ああ、そう言うことになるな。PCのゲームしかやって無かったからもうWDのは諦めようかと思ってたけど、こんな形で出来ると

は思ってもみなかったぜ」

「きっと驚くぞ、余りにリアルすぎてな」

「それはもう死ぬほど聞いたさ」

こいつが初めてVRと体験した時の話は何度も聞いている。貧乏への嫌味かこんちくしょう、とやさぐれた瞬間もあったが、それをスルーしている内に俺のスルースキルは更に磨きあげられたものになった。そんなに磨きあげられなくても正直良かったのだが。

兎に角、話もそこそこに俺たちは再び昼飯を食べ始めた――。



「へー……これがヘターナルオンラインか」

夕食を終えた俺は自室に備え付けられたPCを覗き込み、そんな事を呟いた。

一昔前はPCを家族に一つつつ完備なんて貧乏家庭が出来るはずも無かったのだが、最近のPCは随分安くなったもので、こんな貧乏家庭でも余裕で人数分を買える程である。

そして俺はそのPCでヘターナルオンラインの公式ホームページを閲覧していた。

そこで知ったヘターナルオンラインの世界観は、なんと言うか……混沌としている。比率で表すならば、中世ヨーロッパ…日本の江戸…西部劇、5…3…2と言った感じだ。本当に混沌としてい

る。

キャラクターの成長には職業制ジョブを用いているようだ。公式ホームページに載っているのは最初の《ノービス》と一次職の《ファイター》、《プリースト》、《メイジ》、《スカウト》の四つの職業で、Lv5になった時点でその四つから選んで転職できるらしい。

更に、サブ職業として生産職が選択できるそうだ。こっちでも経験値は入るので、サブをメインとすることも出来るらしい。

公式ホームページをとりあえず一通り見終わった俺は、今度は攻略サイトの方へ移動した。

攻略サイトとっても、クロースドβテストの情報しか載って無いのでそこまで多いとは思わないのだが――、

「――って、うわっ」

攻略サイトを開いた俺は余りの情報量、文字量に思わず声を上げる。

こちらには初期の五つの職業しか載って無かった公式ホームページとは違い、それに加えて六つの職業が増えている。《ファイター》から派生するらしい《ウォリアー》、《ブロウラー》、《クルセイダー》と、《メイジ》から派生するらしい《ソーサラー》、《エンチャンター》、《サモナー》だそうだ。

しかしこれら六つのうち《ウォリアー》と《ソーサラー》以外は名前だけであり、転職に成功したのはその二つだけである事が書いてあった。あとの四つは転職クエストの時に名前だけ出たらしい。

そのあとも俺は様々な事を読み込みながら、夜の時間を過ごしていったのだった――。



ついに……、ついに……ついに……！

「「来たあ————っ！」」

夏休み初日。昼飯を早々食べてリビングで三人揃ってそわそわしている、唐突にピンポン、とインターフォンが鳴った。そこからの夏姉の動きは素早かった。シュタツ！ と擬音が付きそうな速度で玄関へとダッシュし、扉を開ける。そこには爽やかな笑顔の宅配便のお兄さんが立っていて、夏姉はもの凄い速さで印鑑を押したかと思うともう荷物の運び込みに入っていた。宅配便のお兄さんもびっくりしてましたよ、ええ。

とりあえず俺たちはそれを各々の部屋へ持っていく、自分の身体をスキャンする。

このスキャンというのは、WDの中に自分の身体の詳細を読み込ませることを指す。

これの具体的な方法はWD本体を何処か……机の上とかに置き、その前に下着姿になって立つ。そして「スキャン」と音声を発するとWD本体から帯状の赤いレーザー光線が俺を頭から爪の先まで通過していく。それを十秒程するとピーツと電子音が鳴り完了となる。これでどうやって身体の情報を読み込んでいるのかは全くわからないが、とにかくそういう物らしい。

そして何故、こうやって身体のデータを読み込ませるのかと言え
ばもちろん、キャラクターの作成に使うからだ。

無論、一からキャラクターを作ることでも不可能ではないのだが、
それだと手間がかかり過ぎるし、第一に扱いづらい。本来の自分の
身体とかけ離れたそれを使うのであれば、それは現実での身体と違
った重点などになり、容易に動かす事が出来なくなるのだ。

そして俺はそのデータをP Cの方に移し、キャラクターを作って
ゆく。

顔や体の造形は基本、変える気は無い。『女の子みたい』とか言
われる顔をしているが、この顔は両親に貰った大事な顔だ。それを
変えるなんて事が出来るか。

変えるとしたら、髪の色と瞳の色くらいだろうか……。

俺は小一時間P Cと格闘し続けた。

部屋の中にはマウスをクリックする音と「……うん……」とい
う俺の不安げなうめき声だけが木霊していた。

しかし、それも昔の話。今の俺はP Cに表示されている俺のキャ
ラクターを見ながら、満足げに頷く。

「うん。これでいいだろ」

P C画面に映るのはトランクスタイプの下着を着用した仮想での
俺の身体。

変更した髪の色は暗い紺色と鈍い灰色の斑だ。まだら比率的には、紺色..
灰色が3..1と言ったところだ。この髪色は俺が愛読していたとあ
るライトノベルの主人公の髪色であり、気にいていた配色だ。こ
の色を出すのに苦労したものだけれど……。

瞳の方は結局、あまり変えなかった。理由として、先にも言った

ライトノベルの主人公が俺の瞳みたいな色だったからだ。より近付ける為に暗さを増してみたのだが、予想外にあっていたのでそうしただけだった。……そう言えばあのライトノベルってどうして売れなかったのだろうか？ 俺的にはそうとう面白かったのに人気がでなかったらしく三巻で打ち切りにされた。続き待ってたのに……。

そんな事を考えながら画面に映るキャラクターを眺めていると、コンコンツと部屋の扉がノックされ、返事もする間もなく扉が開けられる。

「キャラクターの設定終わったかー？」

「いい感じに出来た？」

「あ、夏姉に秋穂。ああ、一応できたよ」

そう言って部屋に入って来た夏姉と秋穂にPCの画面に映る俺のキャラクターを見た。

「あれ？ 顔は全く変えて無いのね」

「そうなんだね。兄さんは何時も『女みたいって言われるのは嫌だ』って言ってたからてっきり変えるのかと思っていたけど」

「あー……、『女みたい』って言われるのは嫌だけど、俺は自分の顔を大事にしたいからな」

「そうね……」

夏姉が、何とも言えない顔でそう呟く。秋穂の方は黙ったままだ。俺の家が父子家庭の貧乏家庭という話を少し前にしたかもしれないが、それは母さんが俺が中二のころ……、三年前に他界したからだ。近所でも評判の美人であった母さんはキャリアウーマンなんかやっついて、バリバリ働いていた。そんな自慢の母が他界したが故の父子家庭であり、貧乏家庭だ。

母さんの生きた証であるこの『顔』はゲームだろうと当然残す。
それが俺の考えである。

「そう言えば、こっちに来たってことはそっちのキャラクターは出来たのか？」

「もちろんだ」

「うん。結構うまく出来たよ」

「へえ、じゃあ俺もそっちのを拝見しに——」

「ダメ」

俺の言葉が終わる前に夏姉と秋穂から否定の言葉が被せられた。

「何でだよ？」

「あんたねえ……。今の自分のキャラクターがどんな格好してるかわかる？」

「トランクスのパンツ一丁」

「そこがわかればいくらおバカな兄さんでもわかるでしょう？」

「バカは余計だが……。別に何も関係無いだろう？」

「こんだけバカだとは正直思って無かったわ……」

「そうだね……」

夏姉と秋穂が心底残念そうに言葉を零し、可哀そうな物を見る目で俺を見てくる。いやいや、何故だ。

「いや、だから何でだよ？」

「何でって、ゆきの方のキャラクターが下着ってことは私たちも下着ってことよ？ 見せられるはず無いでしょうが」

「はあ？ 夏姉や秋穂の下着姿なんて風呂上がりとかにしょっちゅう見てるじゃないか。それが何で今になって——」

そこから先の言葉が続く事は無かった。

バチンッ！　と言う音を俺の聴覚が聞き取ったときには俺はもう女性二人から平手打ちされていた。右が夏姉、左が秋穂というそれは、同時にやられたが故に衝撃を受け流すことが全く出来なくて、半端じゃない衝撃になっていた。

「ゆ、ゆきはっ、何時の間にそんなにデリカシーの無い子に育っちゃたわけ!？」

「そ、そうだよ兄さん！　兄さんにはデリカシーが無さ過ぎるんだよっ!」

そう言って夏姉と秋穂は脱兎の如く俺の部屋から離脱していった。そんな二人を俺は茫然と見送りながら、呟く。

「—————そんなら服着て風呂からあがってこいよ……………」

俺のそんな無駄な抗議の呟きは、誰一人として届く事は無かった。虚しく響くだけであった。



昨日、WDが家に届いてからキャラクターの作成をしたりなんなりあったが、それよりも大変だったのが待つことだった。

オープンβテストの開始が届いたその日ではなく翌日と知ったのはいざログインしようと意気込んだ時だった。まあ、考えてみれば普通の事なのだが、出鼻をくじかれた俺は不貞腐れたように攻略サ

イトを巡回していた。

そのあとは、いつもどおりに帰りの遅い父さんを置いて俺の作った夕食を三人で囲った。その最中には、ログインしたらどの職にするかとか、生産職はどうしようかとか、誠二の奴もくるらしいとか、色々話し込んだ。

夕食を終えた俺たちは早々とベットへと入ったのだが、いかんせん眠れない。俺だけかもしれないが期待とか興奮とか色々混ざりあって全く寝付けなかった。

こりゃしょうがない、と思った俺は結構な時間であつたがジャージに着替えて、闇に包まれた街を駆けだした。その時の様子は、まあおおむね想像通りであると思う。唯一いつもと違ったのは、披露し過ぎて玄関で寝てしまったということだった。

朝、眼を覚ましてから一番にシャワーを浴び、簡単な朝食を作って、食べてから数時間。

そして今に至る。

ベットの上への寝そべった俺の頭にはすでにWDが装着されている。

只今の時刻11…59。そしてそれを確認した時に丁度12…00へと変化した。俺はそれに合わせ、興奮を纏った声を上げる。

「《ワールドダイブ》！」

その声と共に、俺の意識が全て闇へと包まれた。

003…止まるリアルと始まるセカイ【3】

俺は四方が暗闇に包まれた真っ黒の空間へ降り立った。いや、”降り立った”という表現はいささか適切ではない。今の俺は仮の身体すらない意識だけの存在だった。

目の前には『Now Loading』の文字列が躍っていた。一定の周期で点滅を繰り返すそれは、数十秒の内でロードが終わったようで、ひととき大きな点滅のあとに消え去った。

刹那の時も開かずに俺の目の前に数え切れないほどのウィンドウが展開された。これは、システムが俺の脳波を読み取ってアカウントの作成をしているのだろう。一人一アカウントが原則らしく、脳波パターンを読み取ってアカウントを作るらしい。そんな事を考えている間にも、ウィンドウは少しづつ数を減らしていき、ものの数秒でアカウント作成は完了した。

『キャラクター外装を設定してください』

女性っぽいシステム音声が辺りに響く。そして間髪いれずに、

『外部にキャラクター外装データが存在します。インストールしますか？』

という問いが飛んできた。俺は「はい」と短く返事をする。発せられた俺の声は、のっぺりとした現実味の全くない声だった。

しかし、その音声が発せられた直後に俺の視界を白い光が覆う。目を開くとそこには何時の間にか出現した鏡のオブジェクトとそこに映った俺の姿があった。そこに映る俺の姿は、髪、瞳の色以外は

何も変わらない現実と同じ体があった。新たに与えられたその身体は、面白いくらい俺に馴染んだ。

感心しながらその姿を見ていると、再度システム音声が響いた。

『キャラクター設定が完了しました。それではヘターナルオンラインの世界をお楽しみください』

その声と共に、俺の身体が光の粒子となって散った。



「おお……」

思わず俺の口から洩れたのは現実の俺の音声とよく似た感嘆の声だった。

背後には小さな森小屋が、眼前には森が広がっている。

その森は現実より現実っぽい……、こういうとなんか変だが、要は森独特の緑の香りや、さわさわと擦れる葉の音が心地いい。現実と言っても確実に間違えるレベルだ。

ここはチュートリアルを行うためのフィールドだと、攻略サイトには書いてあった。俺はチュートリアル of 事項も俺はしっかりと読み込んでいたので、やるつもりはない。

「こんにちは。世界を渡る冒険者よ」

「——わっ!？」

突然背後から老人の声が聞こえて、思わず俺は飛び退く。

そこには、これぞ森の隠居お爺さんです！　と言った印象の杖をついた一人の老人が立っていた。そのお爺さんは驚いた俺の様子を見て、おっほっほっほ、と笑っていた。

「驚かせてすまんかったな。わしはこの森で隠居生活をしているナスタルというものじゃ」

「あ、はい。俺はスノウと言います」

俺はぺこりと頭を下げながら、思わずそうかえす。

——が、ここで俺は気がつく。このお爺さんの額には五亡星を模した紋章の様な物が浮かび上がっている。これがあるということ、NPCノンプレイヤーキャラクターということだ。NPC——つまり、AIが動かす中に人が入って無いキャラクターだということだ。こんなにスムーズに会話が成立するものなのか……、どう見てもただの人にしか見えな、と俺は初めてのNPCとの邂逅の感想を胸の内で呟く。

あ、ちなみに”Snow”は俺のゲーム内での名前である。スノウ

ゲームをやる時は何時もこれを使う。名前の由来は、”冬紀”から”ゆき”を取る。それを英語にして”Snow”だ。ここで、”冬”を取って”Winter”を使わないのが、俺のこだわりである。……なに？　くだらないって？　気にするな。

「ふむ、ではスノウ、この世界で生活していく上で必要な事をお主は知りたいか？」

「いえ、大丈夫です」

「そうか。では、他の冒険者がそろそろまでそこら辺に腰かけて待っててくれるか？」

「あ、はい。わかりました」

そう言って切り株を勧められたので、俺はおとなしくそこに腰かける。

そこからは森の音や香りに感覚を傾け、森林浴を堪能した。

数分すると、俺の向かい側の切り株に腰かけて目を細めていたナスタルさんが、不意に立ち上がった。俺もそれにつられて立ち上がる。

「む、ようやく全ての冒険者がそろったようじゃ。スノウよ、今からお主を始まりの町と呼ばれる〈ユーレシア〉に送る。あそこは新米冒険者にはうってつけの場所じゃ。良いな？」

「はい。いつでもお願いします」

俺がそう言うと、ナスタルさん「うむ」と満足そうに言って手に持っていた杖を真上へ突き出した。そうする俺の周りを青く光る魔法陣が照らしだした。

「良い旅を」

俺はナスタルさんの言葉を受け、始まりの町〈ユーレシア〉へと旅立った。



人、人、人——……

右も左も見渡す限りの人の壁である。これでは夏姉や秋穂とかとの合流もままならない。……あ、後ついでに誠二も。

ガヤガヤと騒ぎたてる周りの人々を見回し、どうにかならないものか、とため息を吐く。

そんな時、”ポーン”と間の抜けた電子音が、騒ぎ立てる空気を震わせた。

その音に反応して人々は静寂を取り戻す。

音の響きを感じ俺も、何かに導かれたように真上を仰ぐ。そこには、無限に広がる蒼穹の空が広がっていた。そう、”いた”。俺が仰いだ空を真紅の文字羅列が覆った。遠すぎるそれは、文字の羅列であると認識は出来るがなにが表示してあるのかはわからない。瞬間、その文字羅列が一か所に集中していく。それと共に空が蒼穹の色彩を取り戻す。

集結した文字羅列は、空中で水晶クリスタルの形を作る。クリスタルは、文字羅列と同じ真紅の色だった。

『これより、第二次チュートリアルを開始します。一度しか行われませんので、聞き洩らさぬようにお願いします』

クリスタルからシステムによる合成音声を複数重ね合わせ、反響増幅、歪曲したような声が響き渡った。その声音は、本能的に拒絶したくなるような雰囲気を纏っていた。ついさっきまでガヤガヤと騒ぎ立てていた人々も、しん、と静まり返る。

『まず第一に、——このゲームがクリアされるまで、ログアウトをすることは出来ません』

空気が、凍った。

全ての人々がその言葉の意味をすぐには理解することが出来なかったのであらうか。しかし、数秒もすると辺りの人々が叫びをあげた。どうということだ、説明しろ、うそだろ、等々の叫びが辺りを叩く。

そんな中の俺は、意外と冷静だった。——冷静だった、というのはちよつと違ふかもしれない。正直、この事態について行く気も、真に受ける気も無かった。俺は得意のスルースキルで違う事を考え始めた。

——よし、とりあえずこれ終わったら当ても無く走ろう。

俺は自分の中でそういう思考の終結を迎え、再びクリスタルへと意識を戻した。

『ここで言うゲームのクリアというのは、《王の塔》の全てのクリアを意味します』

《王の塔》——それは他のゲームで言うダンジョンである。その塔の高さ、階層、装飾は多種多様。頂上には、”王”の名を冠するボスモンスターが出現するらしい。この《王の塔》の数は、——
——実は判明していない。公式サイトにも書いてなかったし、攻略サイトには、四つだけは攻略出来た、と書いてあるだけだった。

『そして第二に、外部からの接触、外部からの通信切断による強制ログアウトは可能です』

俺はその言葉に、んん？　と思わず首を傾げる。周りも似たような反応だ。

それなら、俺の家は父さんが外すんじゃないか？　——そう言う疑問が俺の中で浮かび上がった。いくらなんでも夕食時になった

ら外すだろうし。だって父さん料理できないから俺に頼りつきりだったしな。俺がいないと父さんの食事が無くなることを意味する。そんな考えをめくらせる俺の聴覚に、再度あの声が響く。

『そして第三に、当ゲームは新たに導入された【Clock up System】を実装しています』

今度は「くろつくあっぷすてむ……？」と我ながら間抜けに呟きながら首を傾げる。

聞いたことも無い言葉だった。俺はその説明を、真紅のクリスタルへと視線だけで頼む。

『Clock up System』とは、ゲーム内の時間を現実においての時間より加速させるものです。具体例で言えば、ゲーム内の時間を現実での二倍にすると現実での半日はゲーム内での一日に相当します。そして当ゲームに導入された【Clock up System】の最大倍率は――』

そこで真紅のクリスタルは一度言葉を切り、衝撃の言葉を続けた。

『――1000万倍です』

俺たちプレイヤーの途方も無い驚愕をよそに、真紅のクリスタルはまたも衝撃の発言をくり出した。

『具体例で言いますと、現実での六秒はこの世界での約二年に相当します』

六秒が、二年……

つまり、現実のわずか数秒はこっちの数年になってしまうという

ことか。壊されていく現実が、新たに構築された非現実が、『こりや、相当な厄介事に巻き込まれたものだなあ』とのん気に俺の囁いた。

んなこと、わかってるっつーの。

余りに衝撃的な事実は俺の驚きという感情と、焦りという感情をショートさせた。そのおかげで俺が考え付いたのは『夕食に送れなくて済むな』である。我ながら神経図太すぎるだろうと思った。

『これにより、外部からの強制ログアウトはお勧めできません』

そう言った真紅のクリスタルは、次の事へと話を進めた。

『そして第四に、デスペナルティの変更があります』

この言葉に、俺はぐくりと思わず息をのむ。

こういう非現実にはアレは付き物だ。つまり、ゲームでのデスペナルティが現実での死。こんな事になるのであれば俺は一生生産職で生きていく覚悟はできている。

こんなゲームで死んだんじゃ元も子もない。

――しかし、俺のこの覚悟は心のゴミ箱に放り込むこととなった。

『死亡した場合のデスペナルティは、レベルを一つダウン。それと待機所への移動後に二十四時間の行動不能となります。死亡した後は、もっとも新しく訪れた町に強制送還されます。この時の行動不能時は、その個人だけの【Clock up System】の倍率を変更しますので、実質時間の経過は感覚に残りません』

この言葉に、安心する一方、驚きがあった。

MORPGでデスペナルティとして経験値の減少はよく聞くが、俺としてはレベル自体を下げるのは聞いたことが無かった。これにより、俺は何とか死亡は無くしたいと思うのだった。

『そして第五に、感覚、生理的欲求をより現実近づけます。視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚、食欲、睡眠欲、性欲などを現実の99,97%の精度で再現します。痛覚に関しては現実の70,00%とさせていただきます』

これには、正直唖然とするしかできなかった。

全感覚の完全接続は不可とされていたWDの常識を覆すものとなった。99,97%ということは完全……ではないのだろうが、そんなことは関係なくなるほどの精度だ。痛覚が七割なのはショック死をなくすための措置なのかもしれない。しかし、七割でも正直痛そう。切られたりしたら相当の苦痛だろう。

『——以上で、第二次チュートリアルの説明を終了とします。これからあなた方の冒険を少しばかり手助けする意味で、十の王器の中の一つをこの世界のどこかに、丁度一時間後に堕とします』

そして真紅のクリスタルは、短い言葉を発した。

『良い旅を』

意図してやってるのか、偶々なのか、——いや、意図してやってるのだろう。最後のこの言葉は、森の隠者であるナスタルさんの言葉と同じだった。

そんな事を思っていた時には、もう、真紅のクリスタルは消えていた。

それと同時に辺りは叫びに、嘆きに、怒号に、罵声に、懇願に、満ちている。

そんな中俺はというとそいつ等を無視^{スルー}して視界の端に表示されている簡易マップを見ながら街の外を目指す。ガツガツと人にぶつかりながらも人垣をかきわけること約一分。ようやく外に出られた。

「よっしゃ！ 思いきり走ってやるぞお————つう！！」

そう言って俺は街の外へと駆けだした。

003..止まるリアルと始まるセカイ【3】（後書き）

完全に勢いで書き始めました。

気分転換に書き始めた物なので、いつか唐突に終わるかもしれないが、その時はごめんなさい。

それまではよろしくお願いします> (´ `) <

004：見知らぬ樹の海で迷子の俺は【1】

「……ここは、どこだ………?」

状況を整理しよう。

俺は、あの『第二次チュートリアル』とか言うのを聞いて、まあ驚いたけどそのままスルーしたはずだ。そのあとは人垣をかき分け、なんとか外に出たはず。それから街の外に出て思い切り走ったんだ。そう。何時ものように狂ったようにシャウトしながら。ゲームの仕様なのか余り疲れにくくなってたこの身体のおかげで何時もの二倍近くの時間を走っていたはずだ。

そして、今だ。

ギャーギャーと不気味な鳥の声の木霊する。俺の周りを囲むのは森……、というか樹海だった。昼間のはずなのに、周りの日の光は樹木の葉に隠されて何処か薄暗い景色が広がっている。

「明らかに……、明らかに初心者が来る所じゃないだろう、ここは………」

今までモンスターに遭遇しなかったのが不思議でしうがない。

まあ、その事は俺の運気が高かったからに違いない、と勝手に結論付け、俺はとりあえずメニュー画面をしてみる事にした。「オーブン」と音声を発すると、目の前に薄青で半透明のウィンドウが開かれた。

俺はその項目の中から【キャラクター】の項目を右の人差し指で押し込む。するとウィンドウはキャラクターのステータス画面に映り、様々な情報が記載されていた。

【Snow…ノービス…Lv1】

多分一番上が名前、二番目が職業、最後がレベルだろう。……いや、それ以外あり得ないか。その他にもHP100にMP100と、いかにも初期値っぽいのが並んでいた。

俺は次に【アイテム】の項目へと移動する。そこには何も無いものかと思っていたら、『木の剣』という武器が入っていた。それを見て、そう言えば武器を装備してなかったな、と今更ながらそれを装備する。俺の手元に青い光の粒子が集まっていき、『木の剣』を形作る。無から生み出されたそれを見て「おー……」と声を上げ少し感心し、そして腰に収めた。

「とりあえず……、歩くか」

一応、今後の方針(?)を決め、俺は歩き始めた。————正確には、歩き始め”ようとした”。

「……ん？」

ふと、視界の上の方で何かが煌めいた気がして上空を仰ぐ。

しかしそこには鬱蒼を葉に覆われた僅かな空があるだけで何も無かった。気のせいか、と気を取り直して俺は歩き出す。そしてその瞬間、

————ズウバアツツン——！！

「……っ!?!」

俺が今の今までいた所に激しい衝撃音が響き渡った。俺が慌てて

振り向くと、そこには剣が刺さっていた。

「はえ？ ……——」

思わずこぼれてしまった間抜けな声。

しかしその声もすぐ消えた。俺の視線の先に刺さる剣はとても、とても美しかった。それ故に息を呑み、思わず無言になった。

特にこれと言って特徴的な飾りがあるわけではないのに目を引くその姿と、透き通るような蒼銀の刃を持ったそれは闇夜に浮かぶ銀色の月の様に美しかった。細く長い刀身は細剣レイビラと片手剣ロングソードの中間、と言った感じだ。いや、やっぱり片手剣の方が合っている気がする。

そして俺はそれを小鳥が餌をついばむような軽い手つきで一度触れた。瞬間、そこから薄青で半透明のウィンドウが開いた。そこには、こんな事が表示されてあった。

【蒼銀王の剣…《シルヴァリオン》】

【この剣は如何なる者も操る事が出来る。善を慕う者も、悪を望む者も、和を好む者も、平を嫌う者も、全てが、この剣で舞う。そしてこの剣は、主と共に在る。】

【《シルヴァリオン》を入手しますか？ Yes or No】

俺の指が勝手に、イエスの部分に触れた。

それとともに【《シルヴァリオン》を入手しました！】と言うものに変わった。俺は、光の粒子へと変わっていくその剣を追うように【アイテム】の項目を開く。そこには、新たにデフォルトされた剣のアイコンがあった。俺はそれを何かに憑かれたように滑らかな動作で装備する。先ほどと同じく手元に光の粒子が集まってゆく。俺はそれを握り、持ち上げた。——と、思った。

「う、うおおおおおい————つ!!」

その重量に耐えきれず、ザクツ、と音を立てて《シルヴァリオン》が俺の手に握られたまま地面に刺さった。

俺は自分の叫び声に、幻想に浸っていたような気分から現実へと帰還した——あ、いや、ここ現実じゃなかった。

「ぐおおおおおおおお……——」

獣のような低い唸り声をあげながら《シルヴァリオン》を両手で掴み、持ち上げようとする。……のだが、ぴくりとも動かなければ、うんともすんともなんとも言わない。”如何なる者も操る事が出来る”んじゃないのかよ!? と、唸り声をあげるのに忙しい口の代わりに思考が叫ぶ。

「——ぐっ、……はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……」

走った後もこんなに息が上がらなかったというのに、酷い息の荒れようだ。

だが、これで少しわかった事がある。ついさっき（唸ってる時）思い出したが、これは攻略サイトに書いてあった『低レベル者が高レベルの武器を装備した時に起きる現象』だ。具体的には、そんな事態が起こった時に武器の方は本来の重量の数十倍、数百倍、はたまた数千倍にまで重量を引き上げて、無駄に振り回せないようにするらしい。実際、振りまわすどころか持ち上げられていないのだから成功なのだろう。

「てことはLVが足りないってわけか……。——いや、そりゃそうか。考えてみりゃ当然だな、《ノービス》のLV1がこんなレアアイテムっぽい武器装備できるはずが無い」

そんな風に思考が結論へと至った時、ガサガサッと木の葉は擦れる音がする。俺は反射的に身構えてそちらを向く。俺の視線の先――生い茂る草木の間から顔を出したのは、紫と黒のでっかい芋虫だった。毒々しい。

確認することも無く、それがモンスターだと悟る。……しかし、一向に襲ってくる気がしない。俺は不審に思っ^てモンスターの事を注視する。そしてモンスターの上に現れたのは【???】と言う表示とその下に青いHPバー。《???》と言うところには本来モンスターの名前が入るはずなのだが、プレイヤーとモンスターのLvが開きすぎていたりすると見れないらしい。ようするにヤツは相当格上のモンスターだってことだ。うへー……。

そして同時に何故ヤツが俺に攻撃してこないのかもわかった。何故かと言うと、ヤツが非好戦的^{ノンアクティブ}モンスターだからだ。これはヤツの《???》が黄色だったことから理解した。ちなみに逆の好戦的^{アクティブ}モンスターは名前の部分が赤色で表示されるらしい。

俺はヤツが攻撃してこないモンスターだとわかると少しホッとして息を吐く。その証拠にもヤツはそこらへんの葉っぱをムシヤムシヤと食べている最中だった。

「それなら逃げるべきだな。負けるのは目に見えてる」

うん、そうだそうだ、と俺の中の二等身の俺が同意する。……そんなの居たのか、俺の中。

そしてそんなアホな事考えていた時、ふと、ある考えが思い浮かんだ。それは《ノービス》のLv1が格上すぎる黒紫の芋虫に勝てる方法。だが、成功するとは限らない。むしろ失敗しそうな気がする。

しかし、俺はそれを試さずにはいられなかった。

故に俺は剣を【アイテム】の項目へとしまった。

手ぶら、初期装備、初めの職業のLv1、というこの世界での最弱に位置する筈の俺は、ゆったりとした歩みで黒紫の芋虫へと向かう。自分でも吃驚するくらい緊張していない事に、俺は少し呆れた。黒紫の芋虫は僅か10センチメートルの距離にまで近づいているのだと言うのにまるで俺が存在しないかの様に葉をムシャムシャと頬張り続ける。

俺は何も握ってはいない右手を差し出す。仮にそこに剣があるのならば、振りおろせば黒紫の芋虫の首を確実に切り落とす位置。俺は空いた方の左手で「オープン」で出現させたウィンドウを操作する。

利き手ではない左手の所為か、やはり存在した緊張の所為か、ぎこちない動作で俺はウィンドウを操作していった。そして最後――

俺は《シルヴァリオン》を装備した。

握った右手が、途方も無い重さを感じ取る。俺はそれを支えるなんて先刻のような馬鹿なことは考えず、重力に力を貸してもらいうように思いきり振りおろした。たかがLv1の腕力でも少しは足しになるようで、《シルヴァリオン》の落ちるほんの少しだけ速度が増す。

斬ッ

「グギャッ」

《シルヴァリオン》が、黒紫の芋虫の首を切り取った。落ちてゆ

く刃に無抵抗に己の首を差し出す様は、ギロチンに首を掛ける死刑囚のようだった。

そして黒紫の芋虫が、青い光の粒子となって散った。それ共に”ポーン”という電子音が俺の耳に届いた。はやる気持ちでキャラクターのウィンドウを開けてみると【Snow…ノービス…Lv3】と変化していた。そして俺は狂喜した。

「は、は、ハハハ……、マジ……か」

余りの喜びに上手く感情を表に出す事が出来なくなるほどだった。そしてまたガサガサと擦れる音が鳴る。そして沸いて出てきたのはまるで『殺してくれ』とでも言うようなタイミングで出てきた黒紫の芋虫の大群。しかもそのすべてノンアクティブである。

もはやあれは脅威ではない。あれは――、

餌だ。^{エサ}



数分後、まだ三分の一も喰い終わっていない時。

”ポーン”と本日五回目である電子音が樹海の空気を震わせた。俺は地面に食い込んだ《シルヴァリオン》を【アイテム】の項目に戻すと今度は【キャラクター】のウィンドウを開いた。するとそれと同時に追加で開かれるウィンドウ。そこには、

【転職可能Lvまで達しました。転職しますか? Yes or

No】

——とあり、俺は迷わずイエスを叩く。

【どの職業に転職しますか？】

【《ファイター》……仲間を守る戦士】

【《プリースト》……仲間を癒す司祭】

【《スカウト》……敵を討ち取る狩人】

【《メイジ》……敵を滅する魔法使い】

俺はそこで特に迷うことも無く、《スカウト》の部分を押いた。何故スカウトかというと、単純だ。一番足の速さが速そうだからである。《プリースト》や《メイジ》は魔法系の職なので問題外。《ファイター》は将来は金属鎧を装備するので重くて走りずらそうだから却下。そうやっていくと必然的に《スカウト》になる。それに《スカウト》は軽装備の小回りが利く職であるはずだから、俺の戦闘スタイルと合いそうだ（まだろくな戦闘した事無いけど）。

【《スカウト》に転職しました！】

その表示を確認してから【キャラクター】の項目を見ると、【S now…スカウト…Lv1】となっていた。何とも言えない満足感を身に奔らせ、俺は歓喜した。

そして新たにその下に【スキル】というものが増えていた。それを開くと、そこには【小剣…Lv1】【片手剣…Lv1】【短弓…Lv1】【索敵…Lv1】【隠密…Lv1】の五つが増えていた。このスキルというのはそのスキルに対応した技能を使うことでLvを上昇させ、使える戦技^{アーツ}、効果を増やしていくと言うものだ。

ここで戦技^{アーツ}の事も説明しておこう。

これは、武器スキル——俺の場合は【小剣…Lv1】と【片手

剣…Lv1」と【短弓…Lv1】だ——が一定のレベルの達すると習得することが出来る”技”である（魔法スキルでは魔^{マジック}技と称される）。これはMPを消費してシステムにより身体をアシストしてもらいう事が出来るので、剣の初心者だろうが誰でも使える。今のところ俺には小剣に《スタブ》が、片手剣の所に《スラッシュ》が、短弓の所に《ショット》がある。

この武器スキルを見る限りスカウトは遠近両方戦えるオールラウンダーであることが予想される。ここから先の転職で遠距離か近距離が決まるのかもしれない。

次に俺は【アイテム】の項目を開いた。

黒紫の芋虫からドロップした《強毒の糸》×7やら《強酸の粘液》×3やらが場所を取っている。その開いた所には新たに《鉄の短剣》《鉄の剣》《木の短弓》《木の矢》×30と、《スカウトセット》というアイテムが追加されていた。これは転職時の餞別、ということらしい。攻略サイトに載っていた。

一応俺は、そこにあった《スカウトセット》なる物を装備してみた。今の服を光の粒子が包み、入れ替わるように俺の防具——というより服装が変化した。今の俺の服装は、カーキのシャツに、その上に明暗の少し違ってはいるがほとんど同色のベストを重ね、ストライプの黒いズボンとそれを中に入れたブラウンの革のブーツだった。

結構似合っている——、と思いたい。

次は《鉄の剣》を装備しようか、と考えたところでやめた。

何故かと言えば、《鉄の剣》で黒紫の芋虫が倒せるかの自信が全くないからだ。スカウトに転職している筈なのに、まだ名前が黄色い《????》で表示されているということはまだまだ格上だということだ。それを、スカウトの初期装備と思わしき武器で勝てるとは思えない。

そこからはまた、俺は徐々に増え続ける黒紫の芋虫の大群を《シルヴァリオン》で喰らってゆくのだった。



ぐう~~~~きゅるるる

「……………腹が、減った」

散々、黒紫の芋虫を喰^{狩り}らい続け、大群が一段落したところで俺は腰をおろしていた。その際に、腹の音が鳴ったのである。

あのチュートリアルとかで感覚がほぼ完全に再現されている、とか言っていたが、本当だった。樹海のせいもあるのか、辺りは結構な暗さである。ちなみにこんな暗さの中でも喰らい続けることができたのは、【索敵・Lv10】のおかげである。視界の端に映る小さなマップにノンアクティブモンスターが黄色い光点として表示されるようになったのだ。それを使って黒紫の芋虫の位置を確認し、ひたすら喰らい続けたわけだ。

そんなこともあって今の俺は【Snow・スカウト・Lv13】のスキルが【小剣・Lv1】【片手剣・Lv12】【短弓・Lv1】【索敵・Lv10】【隠密・Lv10】である。小剣、短弓は全く使っていないので、手つかずの状態だ。

そして腹の件だが、解決策は——ある。

あるのだが、出来れば使いたくない。何故かって？ それは簡単さ。【アイテム】の項目に格納されている唯一の食糧が《黒紫の蟲肉》×12だからだ。幸か不幸か、毒のありそうな名前だが毒は持っていないらしい。備考にそう書いてあった。あと、意外と美味いとか。

——でも正直、食いたくなかった。

しかし俺の腹は『腹減ったあ！』と叫んでいる。

食べたいのに、食べたくない。食べたくないのに、食べたい。そんな葛藤が頭の中を渦巻く。

そして、散々な葛藤の末、食欲が勝った。

人の三大欲求には逆らえないものなのだと、再認識させられた瞬間であった。

俺は意を決して、《黒紫の蟲肉》を実体化させる。目の前に光の粒子が集まりはじめ、ボトリ、という鈍い効果音と共に虫肉がそこへと参上した。

「うぐっ……」

思わず息が詰まる。

そこからの俺はもう自棄^{ヤケ}だった。鼻をつまみ、目を瞑り、右手で虫肉を掴んだあ！そしてそれを口に運んだあ！俺は虫肉を噛みちぎったあ！噛むたびにコリコリとした感触がうめえ！！——

少し遅れてその事実が気がつく。

「美味い……？ 美味い………。美味いっ！！」

三段階に変化する俺のテンション。最初は疑惑100%。そこか

らしみじみとした感じになって……最高に美味しい事に気がついた。
そこから俺は虫肉にがつつき、約十秒の内に跡形も無くなった。

「ま、まさかこんなに美味かったとは……」

と、その時。

「……ふぁ……な、何だぁ？ 眠くなってきた……。あれか？ 腹
いっぱいになったからかぁ……？」

知らぬ間に蓄積されていた疲労と、食事による満腹感により訪れた睡眠欲に対して、俺は逆らうことなく落ちていった……。

004：見知らぬ樹の海で迷子の俺は【1】（後書き）

見知らぬ樹の海で迷子の主人公は……——蟲の肉を食べることを覚えてきました。

005：見知らぬ樹の海で迷子の俺は【2】

バツ！ と、そんな擬音が付いてきそうな凄い勢いで俺は起き上がる。不意に目を覚ました俺は周りをきよろきよろと見回す。

そこは、少しだけ明るくなった樹海が広がっていた。フィールドで寝たというのに、周りにノンアクティブのモンスターしかいなかったおかげで命拾いしたらしい。……というかフィールドで寝るとかどんだけ神経が図太いんだ俺よ……

「あー……、どうしよう。結局帰り道わかんねえじゃん……」

そうなのである。俺は帰り道がわからない！ 今更ながら迷子だ！ 視界の端に映るマップは自分から半径十メートルしか映さないし（索敵のスキルが上がれば広がるっぽい）、大体このフィールドの名前も知らないし……

そんな事を考えていると、ガサガサッと音がした。それとともに数匹の黒紫の芋虫が顔を現す。

「ま、こいつら喰ってからでも遅くはない……、か。幸い、食糧も確保できたしな」

我ながらのん気だなあ、とこれまたのん気に考える。と、そこであることを思いついた。

「……というか死ねば一応帰れるんじゃないか……？」

いやいやいや、帰れるかもしれないけどそれは少し嫌だ。それにレベル下がるし、一日も停止させられるんだから、俺の以外のプレイヤーとレベル帯を離されたらなんか嫌だ。

「うーん……まあ、取り合えずは時間が解決してくれるだろ。俺はひたすら喰ってればいいや」

そんな軽いノリで俺は剣を落とし始めた。



結論から言おう。

時間は解決してくれなかった。

事実、初めてこの樹海に入ってからもう少なくとも一週間はたった気がする。正確な時は日の光がよく見えないからわからん。

ちなみに今の俺はこんな感じだ。【Snow…スカウト…Lv29】の、スキルが【小剣…Lv1】【片手剣…Lv28】【短弓…Lv1】【索敵…Lv27】【隠密…Lv27】である。小剣と短弓は変わらずだが、その他諸々が色々と上がった。その中でも一番うれしかったのは索敵だ。Lv27になったためにマップの範囲が半径27メートルまで広がった。これのおかげで目に見えない木陰などにいた黒紫の芋虫も積極的に喰らう事が出来た。

とそんな事を考えている間にも木の葉の間から黒紫の芋虫が姿を現した。そう言えばまだ名前が見えない。どんだけ格上なんだ、オイ。

思考とは関係なく身体が動く。右手を突き出し、左手が慣れた手つきで滑らかにウィンドウを叩く。このウィンドウを操作する動き

もぎこちない最初と比べたら雲泥の差だ。今では一秒と経たずに勝手に腕が動くぐらいになった。

斬ッ

「グギエッ」

短い断末魔を残して黒紫の芋虫が光の粒子となって四散した。

すると、”ポーン”という電子音が俺の鼓膜を震わせた。俺は慣れた手つきでウィンドウを操作して、【キャラクター】の項目を開く（最初は利き手である右手でやってた操作も何時の間にか全部左手になった）。

【Snow…スカウト…Lv30】

「おおー……。三十代か……。何か三十路になった気分だな」

俺は続いてスキル欄も確認する。が、残念なことにスキルの方はなにも上がっていなかった。まあ、スキルの方はジョブレベルと別口で上昇するっぽいから何ら不思議はないんだけど。

ぐくくきゅるる

腹が鳴く。

しょうがないな俺の腹は、とため息つきながらすっかり食べ慣れた《黒紫の蟲肉》を実体化させるために【アイテム】の項目へと指を走らせた。目当ての物を色々と詰め込まれた所から見つけ出し、実体化させた。――……。って、ん？

「今なんか見慣れないアイテムがあったような……？」

目の前に実体化された虫肉には一旦待ってもらうことにして、俺は【アイテム】の項目をスクロールさせた。

「んん？ 《ポイズンフィン》ってなんだ？
——…あ、もしかしてさっきの奴がドロップしたとか？」

俺は《ポイズンフィン》のアイコンに触れ、備考を呼び出す。

【毒喰らう翅剣…《ポイズンフィン》】

・《デスポイズン・キャタピラ》が極々稀に落とす片手剣。《デスポイズン・キャタピラ》が羽化する時の為に体内で生成した非常に切れ味の鋭い翅の剣。その翅は他の全ての毒を無効化し、自らは猛毒を有する。

アイツは《デスポイズン・キャタピラ》って言うやつだったらいい。アイツやっぱ結構強いんだな……、ただの芋虫どころかポイズンとかデスとか付けちゃってるよ。半端ないよ。

ま、とりあえずその事は置いておくとして俺は《ポイズンフィン》を《シルヴァリオン》の代わりに装備してみた。手元に光の粒子が集まっていく。

そして手に握られていたのは昆虫の薄翅の様な剣。黒と紫の毒々しい翅は二つ、折り重なったようになっておりとても鋭い。

「——お？ おお？ おおお！？」

俺は《ポイズンフィン》を、持ち上げた。

「おお——っ！！」

俺は《木の剣》や《鉄の剣》以来の俺がともに振れる剣が手に入り、歓喜の叫びをあげた。

調子に乗って俺は右手に収まる翹剣を振りまわす。ほっ、やっ、はっ、と短く息を吐ききながら、口の端に笑みを浮かべて俺は剣を振るう。初めて握ったその剣は想像以上に手に馴染む。さすが仮想現実。現実じゃありえな事を軽々とやってのけるものだ。俺は最後に、セイツ、と一声あげて真上から真下へと垂直に振り下ろす。すると、俺の目の前にあった虫肉がスパッ、と真っ二つに切り裂かれ、光の粒子となって消えた。

……………ってえええ!?

「あっ、ああっ! 俺の、俺の飯があ……………うう……………」

くそう……。そんな風に呻きながら俺はガクツと項垂れた。しかし、俺が斬ってしまった虫肉はもう戻って来ない。

「くうう……。まあいいやっ! まだストックはたくさんある。今回は剣ゲットの祝いとして特別に二個食べようっ!」

そう言って俺は《黒紫の蟲肉》を二つ実体化し、目の前に置いた。

「いただきます!」

……………やっぱ、虫肉うめえーっ。



俺が虫肉二つを食べ終えた頃。

ブンブン、と今まで聞いたことのない、虫の羽音のような音が空気を震わせた。俺は反射的にマップを確認しながら、戦闘態勢に入る。マップに表示されている光点は……赤色。つまり、アクティブモンスター。

なーんでこんなにタイミングいいのかなー、なんて考えていると、マップの光点が俺の向かってすごい速度で移動してくる。俺はそれと対峙するために翅剣を構える。本当は《シルヴァリオン》を使いたいところだが、アクティブモンスターはノンアクティブモンスターの様に俺を無視してはくれない。

だから、正面から戦わなくてはならない。

そして俺の前に姿を現したのは黒と紫の毒々しい色を持つ羽虫だった。体長は俺と同じくらいで、身体はまるでスズメバチのようだ。尻には何かで濡れたように輝く鏃の付いた針が見て取れた。しかし、翅だけはスズメバチとは違っていた。ちょうど俺が握っている《ポイズンフィン》とよく似た、鋭い翅を左右に五つつつ、合計で十枚あった。ブンブンと羽音を鳴らす翅の刃は、全てを切り裂く力を持っている気がした。

名前の方はやっぱり《????》と赤く表示されているだけで、分からない。

その黒紫の雀蜂の眼孔がキュルキュルと動いて周りを見回す。そしてその眼が、俺の事を一直線に捉えた。黒紫の雀蜂は「キュウウウルルルッ」と不気味な叫びを放ってこちらへと突進してくる。俺はそれを、地面に付きそうなくらいまで下に構えた剣で、迎撃に入る。

「はッ」

俺は突進してくる黒紫の雀蜂に向かって、身体を少し横に逸らしながら思いきり振り上げる。トッ深緑も上乘せられてか、ヤツのHPが二割弱程削れた。

初めてのまともな剣での戦闘。しかし、俺の手に握られた剣はまるで俺の手の延長線上にある一部であるかのように華麗に、舞い、踊る。ヤツの身体と同じ黒と紫の剣閃が飛ぶ。ある一撃は的確にヒットし、ある一撃は俺の剣と酷似した翅に弾かれ、ある一撃は俺の身体を抉る。

「……………アッ……」

痛い、痛い痛い痛い痛い痛い！

本来の七割程の痛みだと言うのに、痛い。翅に切り裂かれた左の肩口の痛みが燃えるように、鋭く俺を襲う。そこから本物としか思えない血が滴る。しかし俺は、なんとというか、自分で言うのもあれだが……………冷めていた。

（スルーだ、スルー。無視だ。無視しろ。痛みから目を背けろ。この痛みは俺が負ってるんじゃないんだ。無視、無視、無視、無視無視無視無視無視無視無視……………）

そして俺は、痛みを意識から外した。

傷を負った左の肩口と腕は、”痛みの意識の除外”により完全に力を失ってしまった。今は、だらんと無造作に垂れたままだ。俺は余った意識を全て右腕へと注いだ。集中力が、より精錬されていくような感覚。

「おおおおおッ！」

低く咆えた。

それと同時に脳内にあるスキル欄で確認した時にもっとも俺に結びついた戦技アーツのモーションを再生。そしてそれを己に投影。自分の身体が、何かに突き動かされていく感覚。身体が加速され、知覚が加速され、思考が加速される。俺はそれに乗っかるように一閃、二閃、三閃。淡い水色の燐光を纏った翅剣が、正三角形の軌跡を描いた。

片手剣の戦技アーツである《トライスラッシュ》が見事に発動した事に内心歓喜する。

——しかし、喜んでいいのはそこまでだった。

俺の《トライスラッシュ》を受けた黒紫の雀蜂は大きく膨らんだ尻を爆発させてから、光の粒子となって飛散した。爆発の際に、辺りに薄紫色の何かが飛び散った。それは勿論、至近距離にいた俺の体にも掛かっており、相当な臭いを発している。ダメージはないが鼻をつんざく様な刺激臭に、思わず顔をしかめる。

そして、四方から数え切れないくらいの羽音が木霊した。マップを見ると最高に少なく見積もっても、二十……。

「おい、おいおいおいおい。何だよこの冗談、笑えねえよ。この匂いにつられてやって来たってか？ 絶対無理だろ……」

片や格上の黒紫の雀蜂の大群。

片やHPを四割近く削り取られたニンゲン。

……勝敗はもう、目に見えていた。

しかし、俺の中の”俺”はこんな状況を諦める^{スルー}するのはどうにも納得しなかった。

ブンブンと羽音を震わせて巨大なスズメバチが俺に迫る。

「――ハッ、やってやろうじゃねえか」

先刻の声とは全く逆の雰囲気を冠した声。いつもみたいなスルーするときの表情とは違う。口の端が獰猛に釣り上り、大きく歪む。

俺は駆け出した。

異形の怪物に向かって。

その命を刈り取るために。



「はッ……。とッ……。セイツ……」

短く息を吐き、翹剣を走らせる。

最後の一閃で、ようやく黒紫の雀蜂が光の粒子となって四散した。これが、三匹目。俺はまた敵へと突っ込む。HPがもう残り二割程しかないが、そんなことは気にしない。

不規則にステップを繰り返し、その間にも何度も何度も斬りつける。その間に黒紫の雀蜂のHPは僅か数パーセントとなり、俺のH

Pも一割を切った。しかし俺は止まらない。もとより、回復などする気はない。……だってポーシヨン無いし……。

「うおおおッ！」

俺の咆哮と共に、頭の中にある《トライスラッシュ》のモーションを再生。そして俺の体に投影。最後にそれを実行。黒紫の刀身が淡い水色の燐光を纏う。相当な速さで動かされる俺の腕に従って、剣の軌跡が水色の正三角形を描く。それが終了すると黒紫の雀蜂は光の粒子となり、崩れ去った。

そして俺の鼓膜を”ポーン”という電子音が叩いた。

俺はその音に気を取られ、一瞬ではあるが動きを止めた。――が、その一瞬は大きすぎる一瞬だった。ザクツ……という音が俺の耳に届いた。視線を少し下に向けると、自分の胸のあたりから鏃のある大きな針が飛び出ていた。

背後から、それも心臓へと。完璧なるクリティカルヒット。

俺のHPは、一瞬にして喰らわれてしまった。

そこから先は、覚えていない。

005：見知らぬ樹の海で迷子の俺は【2】（後書き）

見知らぬ樹の森で迷子の主人公は……——後ろから心臓を一突きされて絶命しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6009x/>

走りたがりの暗殺者（仮）

2011年10月19日02時10分発行